

子どもの「隠れる行為」：文献研究を通じた解釈 論・空間論・変遷論

苅田，知則
九州大学大学院人間環境学研究院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/834>

出版情報：九州大学心理学研究．1，pp.105-122，2000-03-10．九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



子どもの「隠れる行為」

— 文献研究を通じた解釈論・空間論・変遷論 —

刈 田 知 則

THE REVIEW STUDY ABOUT CHILDREN'S HIDING ACTS

— Some Hypothetical Theories about Interpretation, Space, and Transition —

TOMONORI KARITA

The purpose of this present study was to review some studies about children's hiding in several disciplines. Especially the author focused on children's hiding "acts" in play. At first, the author classified results and considerations of precedent studies into four types according to hiding styles; (1)peekaboo, (2)hide-and-seek, (3)constructing secret spaces, and (4)others. Furthermore, I suggested three viewpoints to understand the motive of children's hiding acts; Interpretation, Space, and Transition. In the Interpretation theory, the motives of hiding acts that were considered in precedent studies were interpreted in two axes; "motive factors" and "researchers' grounds to interpret the motive." As for "motive factors," the motives were attributed to the child's "internal factor" or "external factor." Next, "researchers' grounds to interpret the motive" were assumed two aspects, one is based on the psychotherapy and the other is on the observation of children's play. Then in the Space theory, I distinguished an approach (micro space theory) that discussed interactions between hiding children and physical environments to one (macro space theory) that explicated relationship among "secret space" and other space from the point of view of spacial cognition. At last, I characterized changes of hiding acts in aging as qualitative transitions, and described characteristic hiding acts of each ages as the Transition theory.

Key Words: hiding, child, motive, review

本研究は、イナイ・イナイ・バーやカクレンボ、秘密基地づくり等、子どもの「隠れる行為」に着目し、これまで日本の様々な学問領域においてどのような研究が行われてきたかを概観した。本稿では、最初に「イナイ・イナイ・バー」「カクレンボ」「秘密基地づくり」「その他」という行為の形態に応じて、先行研究の動向を紹介した。次に、子どもの「隠れる行為」の動機を理解する視点として、「解釈論」「空間論」「変遷論」を挙げた。まず、「解釈論」では、「隠れる」動機を子どもの「内的要因」「外的要因」のどちらに求めるか、またその解釈が「日常観察」「病理治療」的背景のどちらで行われたのか、という軸にしたがって分類を行った。第2に、「空間論」では、子どもと物理的空間との相互作用に着目した「ミクロ空間論」と、空間認知の立場から生活環境における他の空間との関係性に焦点を当てた「マクロ空間論」に先行研究の知見を整理した。最後に、年齢によって子どもが興じる「隠れる行為」の形態が異なることから、「変遷論」を展開した。

I. はじめに

幼稚園の教室のドアを開けてみる。そこには様々な子どもの遊びの世界が広がっているわけだが、著者が特に興味を引かれたのは、子ども達の「隠れる」遊びである。年少児クラスを覗いてみると、テーブルの下に3人の子ども達が潜り込んでおしゃべりをしている。次に、年中児クラスに行ってみると、「センサー、カクレンボしよー!」と子ども達が声をかけてくる。もちろん、オニは私だ。外では、年長児が小高い丘になっている園庭の林の中で、秘密基地づくりに励んでいる。

このように、子どもの遊び場面を観察していると、テーブルや椅子の下に潜って遊ぶような原初的な形態から、秘密基地や隠れ家づくりに見られるような比較的高度な形態まで、さまざまな「隠れる」遊びを目にすることができる。

本来、こうした「隠れる」遊びは、ほほ笑ましい子どもの遊びの風景として認識されていた。例えば、東京都世田谷区太子堂の住人を対象として、昭和の初め、昭和30年代、現代(1984)の3つの時代に子どもだった人から、それぞれの遊びや遊び場(及びその思い出)を聞き取り調査して作成した『三代遊び場図鑑』(子どもの遊びと町研究会編集, 1984年)では、子どもも大人も他の様々な遊びに混じって、かくれんぼや秘密基地づくりを楽しく、時には懐かしそうに語る様子が描かれている。

しかし、残念ながら、近年そのようなポジティブな印象を覆すように、少年・少女が被害者と加害者になる凶悪な事件や事故が多発しつつある。その中で社会全般に最も大きなショックを与えた事件が、神戸における須磨・児童殺害事件である。この事件では、「酒鬼薔薇聖斗」と名乗る犯人が地元中学校の男子生徒だったというショッキングな事実とともに、被害者の小学生を殺害したとされる現場が、自宅近くの「タンク山」と呼ばれる雑木林内にある男子生徒の「秘密基地」だったことが報道され、大きな波紋を呼んだ。以来、全国的に子どもを犯罪から守るために「死角のない」まちづくりをす

ることが叫ばれつつある。

その一方で、子どものための遊び環境をデザインしている仙田(1992)や子どもの社会への参加をサポートしている木下(1996)の調査から、まちや地域における子どもの遊び場所が減少してきており、子ども達の居場所が奪われていることが指摘されている。彼らの研究の詳細については後述に譲りたいが、ここで子どもが「隠れる」という事象をあらためて取り上げるということは、Moore(1986)の言葉を借りれば「子どもの領域(Children's Domain)」の重要な側面を理解することであり、子どもの生活環境を考えるうえでも有益であると考えている。

II. 文献研究を始めるにあたっての問題の所与

これまで我が国の心理学研究においては、「遊び」の定義や特徴(例えば、小山, 1992; 中野, 1996, 1992)や遊び場所の構造や特徴(例えば、荻田・南, 1995; 南ら, 1995)に関する議論は、盛んに行われてきた。

しかし、その一方で、前述したような子どもが「隠れる」という事象に対しては、これまで体系的なレビュー論文や実証的な研究が全く行われてこなかった。その第1の原因として、ある学問領域では「イナイ・イナイ・バー」が注目されるが、別の領域では「秘密基地づくり」が取り上げられるといったように、具体的な行為の形態が学問領域に応じてバラバラであるということが挙げられる。

第2に、若干の例外を除き、後に挙げる先行研究の多くは、子どもの知覚環境や環境デザイン、母子コミュニケーションといった主の研究テーマを持っており、その副産物として「隠れる」「こもる」「(保護者・保育者の)目が届かない」「秘密の〇〇」といった言葉で表される事象を、子ども独特の遊びとして紹介しているにすぎない。

そこで、本研究においては、様々な先行研究を整理し紹介するための視点として、子どもが「隠れる」という事象を、子どもが周囲の環境と相互作用することによって生じる一つの「行為」として捉えることにする。これは、これま

で子どもが「隠れる」という事象を、やはり「行為」に着目しながら実証的研究を行ってきた著者自身の枠組みでもあるが(荏田, 1997a, 1997b, 1997c, 1996を参照されたい), 「行為」という側面に着目することで, 上記に述べたような, 先行研究によって取り上げる遊びの形態が異なるという問題を解消できると考えられるからである。

また, おそらく子どもの「隠れる行為」を観察したことのある者であれば, 一度はなぜこのような「隠れる行為」を子どもたちは行うのか, と疑問に思ったことがあるだろう。かく言う著者もその一人である。しかし, これまでの研究の多くは, 前述したごとく, 事象に対して別々の視点を持っていたり, 対象としている行為が異なることによって, 行為の解釈や理解の仕方にも差異が生じ, 体系的な理論やモデルが構築されてこなかった。そこで, 本稿では, どのようにしてそのような「隠れる行為」が生じたのかという解釈やメカニズムが, それぞれの先行研究ではどのように取り扱われていたのかを整理するとともに, それらをもとに, より体系的な「隠れる行為」に関する動機理解のモデルを構築していくことを試みた。

Ⅲ. 本研究で概観する「隠れる」行為の範囲と学問領域

「Ⅰ. はじめに」でも触れたように, 著者の興味は, 子どもが行う「隠れる行為」にある。したがって, 乳幼児のイナイ・イナイ・バーやカクレンボも含めば, テーブルの下に潜り込んだり, 宝物をこっそりと秘密の場所に隠したり, 廊下の陰に潜んだりといった, きちんと名前をつけて分類することのできない遊びも含まれる。小学生に多いといわれる秘密基地づくりもここで取り扱う「隠れる行為」の一つである。また, 遊びに限らず, 先生から注意を受けた子どもが集団から離れて一人たたずむといった, 「閉じこもり」と表現されるような行為についても取り扱う。

すなわち, 「隠れる」という言葉を代表として用いているが, 基本的には, 潜む・籠る・隠す・

囲う・秘密・(自他を)区切る・人目に触れない・陰になる・偽る・集団から離れる・閉じこもる・引きこもる等の言葉で表現される子どもの行為全般を対象とする。

以上のような観点のもと, 本稿でレビューする研究領域は, 子どもの教育・保育, 仲間関係, 遊び, 遊び環境など, 基本的には子どもに関わる領域の研究である。具体的には, 教育学・地理学・発達心理学・環境心理学・建築学(特に子どもの遊び環境デザイン)・子どもの社会参加論等であるが, 青年期以降を対象とした精神病理学・建築学・心理学の「隠れる行為」に関しても, 子どもの「隠れる行為」からの発展性を考えるうえで若干触れたいと考えている。

なお, 小動物が肉食獣から襲われたときに小さな穴に逃げ込むといった動物生態学上の「逃避」は動物の本能的行動であり, 見方によっては, 子どものみに限らず人間全般の「隠れる行為」の源泉と考えることができるかもしれないが, ここでは論点が広がりすぎるため, あえて紹介はしないこととする。

最後に, 本稿でレビューした研究の多くは我が国で行われたものである。これは, 交通事情や住宅事情といった物理的背景とともに, 保育や教育に関する理念・子ども観などの文化的背景が英米文化とは大きく異なっているからである。しかし, 心理学における認知過程のように, 文化を越えて共通すると考えられる仮説や理論もあるため, 英米における研究動向についても若干コメントを加えたい。

Ⅳ. 行為に着目した先行研究の整理

先に簡単に述べたように, 「隠れる行為」に関連する知見を見いだしている研究は, それぞれに取り扱っている遊びの形態が異なる。ここでは, それらの遊びの形態を(1)イナイ・イナイ・バー(2)カクレンボ(3)秘密基地づくり(4)その他, に分類して先行研究の知見を整理する。

(1) イナイ・イナイ・バー

発達心理学の分野では, 「隠れる行為」の最も

初期の形態は、イナイ・イナイ・バーだとする意見が多い。それは、Bruner(1983)らのイナイ・イナイ・バーに関する体系的な研究によるところが大きい。

Bruner(1983)は、母と子の間で生じるイナイ・イナイ・バーの詳細な分析を行った。彼の研究結果を簡単に示すと、生後6ヶ月から11ヶ月は、73回観察されたいイナイ・イナイ・バー全てのエピソードにおいて、母親が最初に「イナイ・イナイ」と隠れており、また隠れた全体の比率も、母親が43.8%に対して子どもが28.8%と、母親の方が多く隠れている。同様に、「バー」と現れる割合も、この時期は母親が75.3%で、子どもは24.7%とやはり母親の方が多く現れる役割も果たしている。

それが、生後1歳2ヶ月から1歳3ヶ月になると、32回のエピソード中、78.1%の割合で子どもが最初に「イナイ・イナイ」と隠れる役割を担い、遊び全体の中で隠れる割合も93.8%までが子どもに変わる。更に、「バー」と現れるのも、やはり子どもが母親と逆転し、78.1%を占めるに至る。このことから、受動的な参加者であった子どもが、能動的な主体者(agent)へと変化していく過程が実証的に明らかにされた。

このようなイナイ・イナイ・バーとしての「隠れる行為」の変化について、Singer & Revenson(1978)は、次のような考察を行っている。つまり、最初は母親が「イナイ・イナイ」と隠れて「バー」と再び顔を見せる一連の行為をじっと見つめているだけの乳児が、やがて「イナイ・イナイ」と隠れた母親の動作を注意深く見つめ、「バー」と再び現れると声をあげて笑うようになるが、これは「人の永続性」の概念を獲得した子どもが、母親が再び現れることを期待し、その期待が的中したことと、「再び現れることができた母親の能力」に満足するからだ、と。

これらの先行研究で得られた知見を、本稿でテーマとしている「隠れる行為」を理解するという枠組みから見ると、「イナイ・イナイ・バー」にまつわる母子関係のエピソードを分析する中で、「イナイ・イナイ・バー」という形態の「隠れる行為」が、「人の永続性」の概念などの子ど

もの知能に関わる側面と深い関わりを持っていると考えることができるのではないだろうか。彼らは、ポジティブな影響があるとまでは述べていないが、「隠れる行為」が子どもの発達に与える影響を検討する方向性を示していると言え、非常に興味深い知見であると考えている。

しかし、その一方で、「人の永続性」の概念が形成されたり親子の関わりが変化することで、「イナイ・イナイ・バー」における役割の交代が生じるとは考えにくいし、彼らもそんなことは一言も言っていない。あくまでも関連性を指摘しただけである。もちろん、これらの先行研究は、「イナイ・イナイ・バー」自体を研究対象としているわけではないので当然ではあるが、「イナイ・イナイ・バー」という「隠れる行為」が行われる動機を理解しようとする場合には、まだ不明な点が多く残されている。

(2) カクレンボ

カクレンボに関しては、これまで日本国内においてもいくつか研究が行われたり、カクレンボ論が展開されてきた。

中川(1993)は、大学の授業で伝承遊びを取り上げる中で、大学生達が子どもの頃、カクレンボ・おにごっこ・かごめかごめの中で、圧倒的にカクレンボが好きだったことに着目し、大学生に対してカクレンボがなぜ好きだったかを尋ねた。その自由回答から、カクレンボの主題として「隠れること」と「見つけられること」を挙げて隠れる側の心理を記述するとともに、オニの側にも目を向け、「鬼の孤独」について考察している。

まず、カクレンボが好きだった理由で最も多かったのは、「隠れること」であり、その中でも特に、誰にも見つからない隠れ場所や自分だけの秘密の場所といった「ちいさな自分だけの世界」(p40)を探しだそうとするように、「隠れる場所を探すのがおもしろい」と答えた人が多かったという。このように自分だけの世界を持ちたいと願うことから、「他者とともに在ること」と同じくらい「私一人で在ること」への追及が始まる、と中川は解釈している。

次に、カクレンボが好きだった理由として、「隠れているときのスリルが面白かった」、「いつ見つかるかと思ってドキドキするのが、とても面白かった」といった「隠れているときの緊張感」が挙げられている。これらの自由記述の回答をもとに、中川は『精神史的考察』を著した藤田省三の概念を用い、カクレンボに含まれる「死と再生」の過程を考察している。

「隠れること」が「死」の陰喩であるとするならば、「再生」を表わす行為は、「見つけられること」である。カクレンボをしている間に、上手に隠れた子どもでも、隠れている間に孤独感が沸き上がってきて、「見つけれたくないけど、見つけれたい」という複雑な心境になる。したがって、オニによる発見は、隠れること(=「死」)からのよみがえりであり、見つけれないでいる孤独からの開放、遊び仲間への「復帰」であると解釈している。

更に、「隠れる」行為者であるコだけでなく、「見つけだすもの」としてのオニも孤独や不安と戦わなければならない。オニは目をつぶって数を数えなければいけないが、次々とコが隠れてシーンとなると孤独で寂しい気持ちになっていく。不安になって数をとばして早く数えたりするが、目を開けると誰もいないことで更に不安になる。そして、見慣れた場所なのに自分だけがどこか知らない場所にワープしたような感じになったり、仲間が皆いなくなってしまうのではないかという不安にも襲われる。

ここで一人でもコを発見できると元氣も出てくるが、なかなか見つけだせないと、どんどん孤独と不安が膨らんでいき、「家に帰りたく」なったり「泣きたくなる」ほどカクレンボという遊びがいやになる。

中川は、この体験を迷子になった時の不安と似ており、カクレンボは「鬼も、隠れるものも見つけれたり見つけられたりすることによって、相互的に死から再生しあう」(p67)という構造を持っている、と述べている。

以上のことから、中川は、カクレンボの構造は「死と再生」であるとともに、「行って、帰る」構造であると述べているわけであるが、こうし

た中川のカクレンボ論は非常にユニークであるし、カクレンボに興じる子ども達の微妙な心の揺れを如実に表現しているように感じられる。

しかし、問題点がないわけではない。例えば、中川は、2歳ぐらいの幼い子どもが、ちょっとした間も一人で隠れていられないのは、その孤独に耐えられなくなったからであり、孤独に耐えられるようにならなければ、カクレンボを遊ぶことはできない、と述べている。しかし、はたしてこの解釈は本当に妥当であろうか。中川も事例として紹介している通り、子どもは大きなうれしそうな声をあげてその身を顕わす。それは、あたかも母親と関わりを持つことを楽しんでいるかのようでもあり、そもそも「隠れる行為」の質が、カクレンボという遊びの中で隠れる続けることができる年齢のソレと異なっているのではないだろうか。

この点について、カクレンボをルール理解の枠組みから考察したElkonin(1989)の非常に興味深い研究がある。まず、Elkoninが示した事例を紹介しよう。

『年齢の異なる子どもたちを相手に(一人の女兒は三歳、もう一人は六歳)、われわれが企てたあるカクレンボで、われわれは次のようなことを観察した。

私と一緒にカクレンボをしよう、と提案すると、この女兒たちは喜びをかくさず、この提案を受け入れた。彼女たちは隣の部屋に飛び込み、外套のかかった洋服掛けに身を隠した。私はもちろん、すぐに隠れ場所が分かったのだが、気がつかないふりをして、別の場所を探しはじめた。私が探すにつれて、洋服掛けのかけでドラマが演じられた。幼い方の女兒は、洋服掛けから飛び出すか、あるいは、少なくとも、自分の居場所を知らせて私が発見できるように叫び声をあげたがっていた。この女兒にとって、明らかに、この遊びの意味のすべては、大人である私との結びつきの中にあった。実験者はあたかも、年少の女兒の行動を規定する場面全体の中心であるかのようにだった。年上の女兒は、妹の口をふさぎ、黙ってここにいるのよ、といいながら、彼女をその場におしとどめた。説得は功を奏さず、最終的には、年少の女兒はうれしそうな声をあげて、探し手に抱きつこうと、まっすぐ跳びだして

きた。』(pp.138-139)

Elkoninは、この事例から、年少児にとっては、遊びの意味は、『一方では隠れるという過程そのものに、もう一方では大人との交流に存在していた』が、年長児にとっては、既に一定のルールは明確であり、彼女にとって遊びの意味はルールに従うこと』にあったと述べている。この研究は、あくまでごっこ遊びやスポーツ遊びの一つとしてカクレンボを捉えた上で、物陰に隠れるなどの行為そのものを楽しんでいる状態から、やがてカクレンボに潜在するルール性を理解し参加者同士の役割分担を演じる方向へと変化して行く様子を、ごっこ遊びの発達像として記述している。「隠れる行為」そのものの発達の変遷を読み解くアプローチではないが、同じカクレンボという「隠れる行為」においても、年齢によって意味が異なることを示しており、その動機を理解しようとするうえで非常に重要な示唆を示しているといえよう。

また、中川は、カクレンボにおいて、隠れている者の発見は、オニにとってもコにとっても孤独からの開放であり、オニとコは見つかり見つけられたりすることで相互に死から再生しあう構造を持っており、子ども同士の信頼関係がなければカクレンボは維持されないことを指摘している。これは、カクレンボに加わる成員間の相互依存性と相互信頼性がカクレンボの重要な条件であることを指摘しているわけだが、具体的な関係性についてはほとんど触れられていない。

一方で、こうしたカクレンボにおける対人的な要素について、浅見・佐々木(1990)は実証的な検討を加え、隠れる子どもの性格に応じて、また誰がオニになるかに応じて、オニから離れて隠れる距離が異なることを見いだしている。

彼女らの研究は、第1に、保育園児(4歳児11名、5歳児8~12名)がカクレンボを興じる公園を、仙田(1992)の6つの原空間の概念に基づいて分類し、「冷蔵庫の基地(アジトスペース)」・「大きな木の中(アジトスペース)」・「大きな植え込みの間(道スペース)」の3箇所が、

子ども達から隠れる場所として意味付けられていると述べている。更に、4歳児と5歳児のそれぞれに「カクレンボで一番面白いところ(カクレンボに対する期待)」を尋ね、その内容から園児を「最後まで隠れているところが面白い群」と「見つけてくれるのを待っているのが面白い群」「隠れるところが面白い群」の3群に分けたところ、カクレンボに熱中する時期にあたる5歳児では、「最後まで隠れている所が面白い群」が他の2群に比べ遠い距離をとっていることが示された。

反対に、4歳児は、ようやくカクレンボが面白いと感じ始める時期であるため、上記のようにカクレンボに対する期待と物理的距離との間に必ずしも対応が見られない。浅見・佐々木は、この時期がカクレンボの差異に集団で行動する様子が多く見られるため、統計的に関係が認められなかった可能性があると考えしているが、むしろElkoninが示しているように、ルールに応じた役割の演出よりも、「隠れる」という行為そのものや対人的な交流に興味向けられる年代であると考察することもできるだろう。

また、オニになる人物が、園児達の直接の保育者と、事務的な態度をとるよう教示された男子大学院生、園児達とは直接関係のない現職の幼稚園教諭(女性)である場合、4歳児・5歳児ともに、保育者>男子大学院生>幼稚園教諭の順で遠くに隠れた。浅見・佐々木の考察をまとめると、これはオニになる人物との信頼関係と、その人物の探す能力に関する園児達の予測が関係している。まず、保育者の場合、どんなに離れていても探してくれると信頼しているために距離を遠くとっている。次に、好意的ではない態度をとっている男性大学院生には、心理的距離も物理的距離も遠いが、好意的な幼稚園教諭に対しては、物理的距離が近く心理的な距離の近さを顕わしている、と述べられている。浅見・佐々木は、心理的距離が物理的距離として「隠れる行為」に現れていると言いたいわけだが、保育者に対する距離の取り方は「信頼関係」として説明しているのに対し、男子大学院生と幼稚園教諭に対しては「心理的距離」と「物

理的距離」の関連として説明しようとしており、若干この考察に関しては疑問が残る。ただし、結果そのものは、子ども達がオニになる人物に応じて「隠れる」距離を調節していることを示しているし、体系的な検討を加えることでより精緻なモデルができる可能性は感じられる。

さて、後の二つの研究に比べると、中川のカクレンボ論・「隠れる行為」論はあまりに人間の行動を単一的・普遍的に捉えすぎているという批判を加えることができるだろう。その意味では、Elkoninや浅見・佐々木の研究に見るように、カクレンボという「隠れる行為」の形態においては、年齢やオニとの関係性、空間の特性などに応じて、子ども達は柔軟に「隠れる行為」の形態や意味を変化させており、「隠れる行為」の動機や意味を十全に理解しようとするならば、行為が行われた背景となる状況も含めて検討を加える必要がある、といえるのではないだろうか。

(3) 秘密基地づくり

子どもの「隠れる行為」の中でも、多くの映画や文学作品の題材として用いられ、最も印象的な存在と言えるものとして、「秘密基地」づくりが挙げられる。したがって、他の形態に比べ、秘密基地づくりに関連した研究が最も多い。特に、子どもが主体的に周囲の環境に働きかけ、自分たちの使い勝手が良いようにカスタマイズしたり、自分たちの領域であると主張する等の特徴を持つことから、環境心理学や地理学における生活環境の認識に関する研究や、建築学におけるデザインの提言、および子どもが社会に対して参画している方法論として取り上げられていることが多い。

まず、具体的に建物のデザインのコンセプトとして秘密基地や隠れ家を用いたり、子どもが自由に遊ぶための環境デザインのガイドラインを作成している建築学に目を向けてみよう。

建築家である仙田(仙田, 1984, 1992; 仙田・中山, 1986)は、自らの子ども時代の経験とともに、建築家としての経験から、子どもの遊び空間には、自然スペース・オープンスペース・道スペースという中心的な3つの空間と、アジ

トスペース・アナーキスペース・遊具スペースという3つの従の空間の、合わせて6つの原空間があると述べている。

このうち、「隠れる行為」に関連した空間は、アジトスペースである。仙田(1992)は、このアジトスペースを『親や先生、大人に隠れて作る子どもたちの秘密基地をアジトスペースと呼んでいる。子どもたちの共同体としての意識はぐくみ、友情や思いやりだけでなく、ある時は裏切りや暴力をも体験させる』と説明している。

また、仙田(1992)は、どろんこ保育というユニークな保育理念をかかげた野中保育園の設計を手がけた経験から次のように述べている。

『子どもはなぜか、すみっこ、はじっこが好きである。大勢で動き回っているかと思えば、一人でじっとしたい時もある。体が入りだけの小さな空間は胎内の記憶か、子どもにとって心地よいものなのである。(中略)従来、死角のない空間を作るとというのが保育園の基本であった。この保育園では、死角がたくさんある。子どもたちにとっては保母さんから目の届かないほうが面白い。』(仙田, 1992, p96)

これと同様のことを、子どものための遊び環境に関する計画やデザイン、運営管理のためのガイドラインを編集したMoore他(1995)も指摘している。

以下の二つの引用文は、このガイドラインの中で『隠れ家と離脱のポイント』として著されている記述(いずれもp17)である。

○ Moore & Wong (1987)

『子どもたちが自分の仲間と関わり合うことは必要だが、それと同時に、グループから抜け出して一人になり、空想に耽ったり外部の圧迫から逃げることも必要である。一人や少人数のグループで静かに認識を深め、社交の場を持ち、手先のささやかな遊びに閉じこもるために、隔離された空間が必要である。隅、角つこなどのスペースが一人遊びや他人を眺めるために要求される。』

○ Moore (1979)

『時々、子どもは一人になりたいと強く感じることもある。それは活発な遊びや争い、あるいは難しかったり面白くないと感じる新しい遊び行動から退きたいからである。子どもはある行動をやろうと決断する前に黙考したり、行動を達成する前に、失敗したと感じずにやめることのできる機会を、デザインによって与えられるべきである。このようにして肯定的な自己概念が維持されるのである。理想的な隠れ家は他の子どもたちから近すぎても遠すぎてもいけない。そこで子どもたちはプライバシーを、あるいは仲間の行動を離れたところから見る機会を得ることができる。』

こうした先行研究を見ると、子どもが「隠れる」という行為はポジティブな行動であり、デザインの上でそのような行為を許す場・空間が保証されるべきである、という共通した理解を示していると言えるだろう。

以上で述べた建築学の分野における知見は、実証データをもとにした理論というよりは、自分自身の子ども時代の体験や建築家としての経験則を基にした建築学的な共通理解というべきものであろう。この点に関して、建築学の分野では、規範的理論、すなわち『考え、概念、あるいは注目すべき現象に関連する原理、原則のスキーム（図式）であり、それを適用することで、はっきりと、あるいは漠然と、一定の賞賛に値する目標が成し遂げられる（Moore, Tuttle, & Howell, 1997）』理論の占める比率が高いといわれており、心理学や地理学を含む人文科学・社会科学における、人間行動の特性に関して体系的・実証的・検証可能な説明や概念、メカニズム（Moore, Tuttle, & Howell (1997) の言葉を借りれば、説明理論）を明らかにしようとするアプローチとは一線を画している。

では次に、説明理論を構築することを目的とした環境心理学や地理学の知見を概観してみよう。

最初に紹介するのは、地理学者である寺本（1988, 1994）が行った子どもの生活環境に対する実地調査に関するものである。寺本は、子どもが描いた絵地図を分析したり、実際に子どもの遊び場所を追跡調査する中で、「秘密基地」「子ども道」「お化け屋敷」「子どもの地名」の4

つの空間が、子どもが生活空間の中で自主的に行動した結果生まれた子ども独自の空間として見いだした。

その中で、秘密基地や隠れ家と呼ばれる遊び場所の特徴として、（ア）概して人目につきにくく、狭い場所が多い、（イ）平均して自宅から150メートル以内の近いところに建設されやすい、（ウ）「隠れる」「隠す」と言った機能を持っている、（エ）基地内部において日常生活を模倣した行動が行える、「家」としての機能を持つ、（オ）仲間とのまちあわせ・情報交換の場としての機能を持つ、等が挙げられている。

寺本が指摘した「秘密基地」が持つ「家」としての機能については、建築的背景を持ちつつ、子どもの社会への参加やまちづくりのワークショップを手がけている木下（1996）が著した『遊びと街のエコロジー』にも同様の記述が見られる。

『子どもの遊びに模倣というのは基本であり、乳幼児の段階から模倣によって様々な生活行為を獲得していくように、模倣は成長にとって重要な行為である。ままごとも家庭生活の模倣であり、そこに敷かれたシートは「イエ」を意味する。秘密基地や隠れ家も家のイメージであり、それは生活している家とは別に自分だけの家を持つという潜在的な自立願望というような生活段階の基本的プロセスとも受け止められている。外に自分だけのイエを持つことと家庭のイエとは、中心と周縁との関係のようなものであろう。（pp.32～33）』

次に、環境心理学的アプローチから、南ら（1995）は、大学生を対象とした子ども時代の原風景の調査と実際の幼児・児童の遊び場の現状調査及び行動観察から、原風景にたちあらわれる空間は、『例えば境内と公園が同様に広がりを持った平面を子どもに提供したり、山林と資材置き場が共に子どもの好奇心を喚起し、探検心を抱かせるといった』子どもに対して空間が提供する機能によって、恐怖空間・秘密空間・危険空間・禁止空間・交流空間・探検空間という7つの空間に分類できることを明らかにした。

更に、以上の7つの空間の相互関係からみた場合、原風景の構造は、(ア)安心空間である自宅の周りに恐怖空間・秘密空間・危険空間・禁止空間が存在し、遊びを展開する終始点となる。(イ)原風景は自宅周辺から外部へと延びる2つのルートの上で展開し、ルートの両端には交流空間や探検空間が存在する。(ウ)ルート上には一休みとでもいうべき安心空間がある。(エ)原風景に示される範囲は川や大通り、線路などの明確な境界線によって区切られる、という4つの関連性があることが示唆された。

仙田の示した6つの原空間は、どちらかという空間を構成する物理的要素に着目した空間概念であるのに対し、南らの知見の興味深い点として、より子どもの情動的側面や子どもならではの用途に着目した空間概念である。したがって、建築学とは異なった心理学独自の概念を提言しているという点で意義深い知見であるといえよう。

しかし、一方で、これらの先行研究に共通する問題点として、「隠れる」ことのできる場所の必要性を説いたり、秘密基地をつくるのに適した場所の特徴を示しているにすぎない点があげられる。すなわち、なぜそのような場所が必要なのか、またなぜ子ども達はこのような「隠れる」場所をつくるのか、といった問いが立てられておらず、またそれを説明する実証的なデータがないという点で、観念的な考察の領域を出ない。したがって、これらの研究に共通している「隠れる」空間に関する知見を統一し、その空間論を基盤として「隠れる行為」の動機や意義に関する問題設定をあらためてたてなおす必要があるだろう。

(4) その他

ここまでは、子どもの「隠れる行為」の中でも、「イナイ・イナイ・バー」や「カクレンボ」「秘密基地づくり」と行った、遊びにネーミングができる形態について先行研究を概観してきた。しかし、問題設定の部分でも触れたように、本稿ではこうしたきちんと名前がつけられた形態にのみ着目しているわけではない。そこで、

著者が行った幼稚園の「隠れる行為」に関する研究(荻田, 1997a, 1997b, 1997c, 1996)を紹介しよう。著者は、幼稚園の自由遊びの時間に、子どもがどのような「隠れる行為」を行っているか、実態把握と「隠れる行為」の構造を抽出することを目的として、幼稚園児(3歳・4歳・5歳児)の参与観察を行った。

その結果、「遊びの内容そのもの」を楽しむ「隠れる行為」として、積み木や段ボールを積み上げておうちや秘密基地を「つくる」タイプと、ロフトの下や園庭の茂みの中など、既に存在する空間を「隠れる」場所として「見つける」タイプが分類された。

次に、「他者との交流」を楽しむ「隠れる行為」として、著者が近づくとカーテンの中に隠れるが、「ここだよ。」と見つけてほしように声を出したり、著者の後を追いかけてながら、著者が振り向くとぱっと物陰に隠れるなど、他者の注意をひいたり、交流を持とうとしているように見える「見つけられたい」タイプと、先生に注意されて一人で廊下に座り込み誰とも口をきかなくなったり、遊びのグループ以外の人物が近づくと「見ちゃだめ(入っちゃだめ)！」と禁止をするなど、他者から「見られたくない」タイプにまとめられた。

更に、「隠れる行為」が行われている場の構造に着目し、隠れる「主体」と隠れ「場所」・隠れる「他者(相手)」との間に、「囲う」「入る」「隔てる」という関係性(三項関係)が成り立っていることを明らかにし、「隠れる」エピソードのプロセスを詳細に分析することで、こうした三項関係が成り立つ状況が、子どもの「隠れる行為」を生じさせている、と考察している。

この一連の研究は、一つの行為形態の枠にとらわれていないために、これまでの先行研究では取り扱われなかった多様な「隠れる行為」を記述していることや、(著者自身の研究であるから当然ではあるが)最初から「隠れる行為」の動機を理解しようとする問題設定が行われているという点で、他の研究とは一線を画している。

もっとも、これらの研究で得られた分類やモデルは、まだ十分に概念化・実証化されている

わけではなく、今後研究を重ねていくことでより精緻化する必要がある。また、幼稚園の中で観察された行為のみを調査の対象としており、より広い生活環境の中で生活している子どもの生態や、子どもが発達していくうえでの行為形態の広がりについても、更に検討を要するだろう。

そこで、次に、子どもから大人への「隠れる行為」の変化・展開の可能性として、青年期以降の「隠れる行為」に関しても、いくつかの研究を紹介しておく。

まず、精神病理学的分野において、社会から完全に孤立してしまう「社会的引きこもり」の特徴や定義を紹介しながら、社会的引きこもりに陥ってしまうメカニズムに着目した斉藤(1998)の著書がある。斉藤は、個人・家族・社会のシステムの接点が失われ連動しなくなったことによって、個人に対してストレスがかけられることで悪循環が助長され、病理的な社会的引きこもりが生じるという「引きこもりシステム」による理解を提案している。

また、うつ病患者用の病棟として、大部屋タイプの病室に対し、“一人になれて一人でない病室”をテーマに4人部屋を本棚や収納棚で視覚をさえぎり、寝たり座ると個人空間、立つと共有空間となる病室デザインが試みられ、自殺率の減少等、治療上有効であったと報告する研究もある(徳永、1997)。

詳しくは後節で述べるが、こうした精神病理学の分野における知見や理論は、一般社会はもちろん、建築学などの他の学問分野に与える影響が大きい。それだけのインパクトと問題性を持っていると言えるし、社会全般の問題性や解決すべき課題に対する解決の方向性が含まれているとも言える。

だが、精神病理学における理論や知見の多くは、特別な精神的・社会的状況におかれたクライアントの体験をもとにしたものである。確かに精神病理学が取り扱う心理的・精神的疾病や病理は、だれでもかかりうるという可能性を持ちながらも、そこから得られた理論を、日常生活をおくる人間、特に子どもに対して適用するのは難しい面があるだろう。

つづいて、建築学の研究を紹介すると、茶室の成り立ちと空間構造を分析した福良(1995)は、茶室の空間構造と人が安心・安全と感じる空間構造を「囲い」という概念を用いて説明している。彼の「囲い」論で注目すべき点は、様々な「囲い」の状態を「安心感」と「(精神的な)自由度」で説明しているところである。

例えば、自分が囲いのある小さな空間にいることを想定した場合、6面全部を囲まれた全く身動きのできない状態では、(他者が入ってこれないという点では、安心かつ安全だろうが)息苦しくて数分と持たない。ただ、上部の覆いを取り外した状態であれば、若干息苦しさは残るもののずいぶん感覚的に自由度が増してくる。次に、腰くらいまでの囲いになると、囲われていることでの安心感もあり、いつでも囲いの外に出ていけるという自由度もかなり強くなる。

では、柵などが間隔をおいて打ち込まれているような囲いはどうだろうか。出入りは自由に行えるため自由度は高くなるが、他人も自由に入出入りできる空間構成になるため、安心どころか不安感が強くなる。最後に、全く柵が無いと、砂漠の真ん中に置かれたような状態となり、不安も高くなると同時に自由のきかない状態に陥ってしまう。

この「囲い」という概念は、前述の著者の研究で得られた主体・場所・他者がおりなす三項関係の「囲う」関係性と同じであるし、隠れる場所の特徴を説明する中心的なコンセプトとしても非常に興味深い。

この他にも、Altman(1975)やWestin(1970)に代表されるようなプライバシーに関する研究も、プライバシーが「隠す」「隠れる」という機能を持っていることから、広義で捉えるならば「隠れる」行為の範疇に含まれるであろう。しかし、こうしたプライバシー研究で対象となるのは主に青年期以降の成人であり、論点が拡散する可能性があるため、主に子どもを対象として取り上げている本稿においては関連性を指摘するにとどめたい(詳しくは小林(1992)などを参照のこと)。

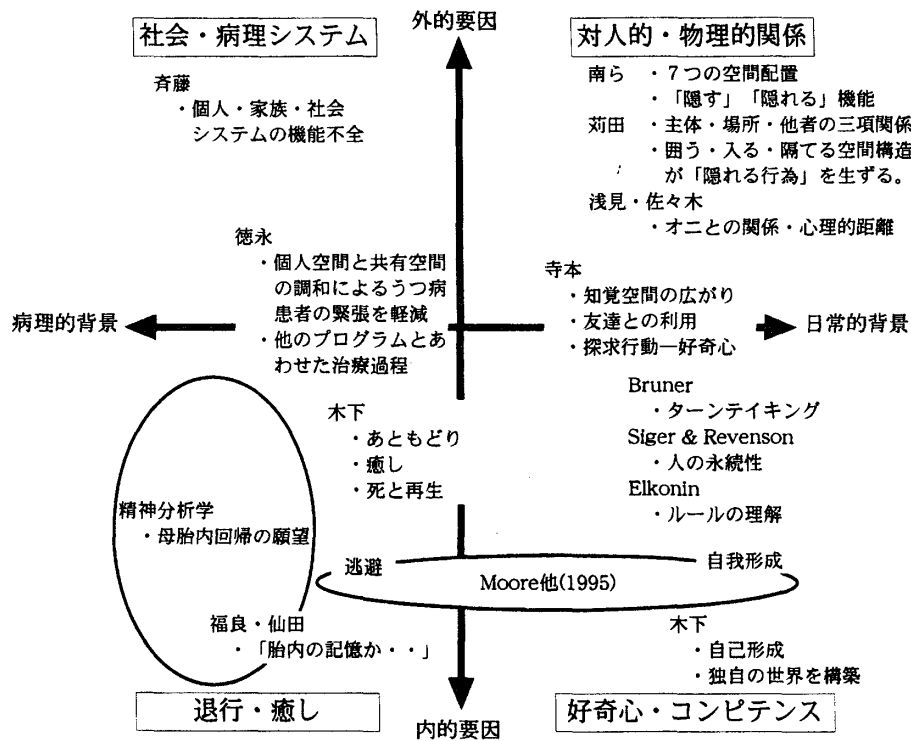


Figure 1 「隠れる行為」の動機解釈に関する整理モデル（仮説）

V. 「隠れる行為」の理論的展望

前節では、「隠れる行為」の形態に応じて、先行研究の知見を概観した。どの研究も、それぞれの研究が設定している「隠れる行為」の形態に関しては、非常に詳細な特徴を捉えているし、個性的な理論を構築しているといえよう。だが、ここまで読まれた方も感じているかもしれないが、やはりそれぞれの研究の間に関連性がなく、バラバラな印象はぬぐえない。そこで、以下では、先行研究における知見の関連づけと整理の枠組みとして、新たに（１）解釈論という観点を設定し、先行研究を否定的にレビューした上で今後の理論的展望として（２）空間論を提示し、更に第３の試論として「変遷論」について討論したい。

（１）解釈論

ここでは、本研究の問題設定の一つである「なぜ子ども達は「隠れる行為」を行うのか」という問いにしたがい、その動機を先行研究では

どのように解釈・考察されていたのかを整理することを試みる。

ただし、ここで取り扱うことは、こうした動機理解に対する混沌とした議論に決着をつけるために一つの理論を構築するということではなく、あくまでもこれまでバラバラだった解釈や理解を整理するための枠組みを提案するにすぎない。したがって、体系的な「隠れる行為」に関する動機理論の構築は、将来の実証研究に委ねたいと思う。

さて、本稿では、先行研究の解釈を整理する枠組みとして、二つの軸を用いる。一つの軸は、行為の源泉を人間の「内的要因」に求めるか「外的要因」に求めるか、という行為を規定する要因に関する軸である。もう一つは、各研究者が解釈を行った背景に関する軸であり、「日常観察」を行って得られた解釈か、「病理治療」をするうえで得られた解釈か、という両極を想定した。以上二つの軸を用いて整理したモデルがFigure 1である。

この二つの評価軸を用いると、大きく４つの

象限が生まれる。まず、「外的要因」に動機を求め「日常観察」を背景に持つ象限には、南ら(1995)、荏田(1997a, 1997b, 1997c, 1996)、浅見・佐々木(1990)が含まれる。これらの研究は、個人の年齢や性別・性格とは別に、空間の特性や機能、及びオニになる人物との関係など、「対人的・物理的關係」に着目していると言える。

第2に、同じく「外的要因」に動機を求めながら「病理治療」の背景を持つ研究としては、斉藤(1998)や徳永(1997)が挙げられる。このアプローチは、斉藤が示す「引きこもりシステム」の問題やうつ病棟における物理的空間構造を治療上効果的に用いようとしており、主に「社会・病理システム」の視点から動機を説明している。

第3に、「内的要因」に動機を求めながら「日常的観察」的背景から研究を行っているのは、Bruner(1983)、Elkonin(1989)、木下(1996)、Singer & Revenson(1978)、Moore 他(1995)である。この象限に含まれる研究の多くは、発達の観点を研究の中に取り入れており、「好奇心・コンピテンス」によって動機を説明しようとする研究のまとめりと言えるだろう。

最後に、「内的要因」に動機を求め「病理治療」を背景に持つ解釈としては、福良(1995)、中川(1993)、仙田(1992)が挙げられる。また、精神分析学で用いられている秘密基地や隠れ場に対する解釈としての「母胎回帰」もここに含まれるとあって良いだろう。この象限は、「退行・癒し」として「隠れる行為」を理解する傾向にある。

以上、簡単に解釈論に関する整理モデルを説明したが、先行研究の中には「なぜこのような行為が行われるのか」という解釈や考察に関しては明言を避けているものもあり、あくまでもFigure 1は、著者がそれぞれの研究のアプローチを再解釈してまとめた一つの仮説である。

ただ、非常に興味深いのは、「退行・癒し」を動機説明の言葉として用いる象限に建築学の研究が含まれていることと、「好奇心・コンピテンス」の象限に地理学や子どもの社会への参加論の文献が含まれていることである。

例えば「退行・癒し」という解釈が精神病理

学や臨床心理学で、「好奇心・コンピテンス」という解釈が発達心理学で用いられるのは当然のだろうが、なぜほとんど接点の無い他分野の研究がこのような解釈を用いるのだろうか。

おそらく、これらの他分野の研究は、独自に「動機を説明(解釈)する」必要がないのではないだろうか。むしろ、研究や調査から得られた知見・コンセプト・概念・デザイン等をうまく表現するための説明付け(accounting)としての言葉が必要であり、精神病理学や発達心理学の解釈から借用しているというのが実情ではないだろうか。

また、全般的に「内的要因」を用いて説明する研究が多い傾向にあるといえる。こうした解釈は確かに妥当性のある場合もあるが、それだけで全てが説明できるわけではないし、上記のように、他の研究分野に流用された時点で、その言葉を使っただけであたかも全てが説明されたかの錯覚を与えてしまう可能性も残されている。

したがって、今後は、きちんとそれぞれの「隠れる行為」(事象)や研究の背景を対応づけた上で、動機の解釈が妥当か否かを評価していく必要があるだろうし、「外的要因」を用いて説明する研究や調査を更に加えながら、個々の「隠れる行為」にあわせた解釈や概念構築が必要になってくる。

(2) 空間論

そこで、次に「外的要因」を用いて「隠れる行為」を説明する一つの試みとして、どのような場所が隠れ場になっているか、空間の利用に関する「空間論」を、先行研究を整理する枠組みとして取りあげる。

既に述べた解釈論とも関係するが、元来、心理学の分野においては、空間や場の特性、およびその他の物理的環境が、行為の源泉となっているという考え方はされてこなかった。というよりは、むしろそのような空間や場の特性を人間がどのように知覚・認知するのか、という人間の内部の処理過程のみに注意が向けられる傾向があった。しかし、近年、心理学においても、Gibson(1979)のアフォーダンス(affordance)理

論や, Barkerら (Barker & Wright, 1951, 1949 ; Barker & Gump, 1964) の行動セッティング (Behavior Setting) 理論など, 空間や場自体が意味を持ち, 人間の知覚・認知・行動を規定していくという新しい立場が生まれてきている。

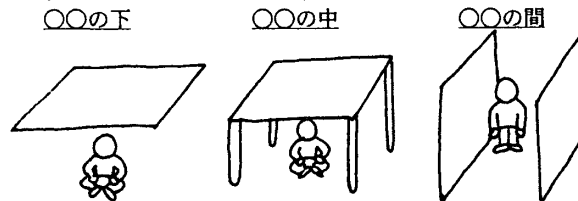
当然, 人間の年齢や性別・性格に基づいた内部情報処理モデルを否定するつもりはないが, こうした人間の外部に開かれた理論を合わせて用いることで, 人間の行動を柔軟に説明できるのも確かである。したがって, ここでは, 子どもが「隠れる」空間や場の特性が「隠れる行為」を誘う (Gibson の言葉を借りればアフォードする) という観点から, 「隠れる行為」に関する理解を深めていくこととする。

さて, 同じ空間利用をテーマにしている研究でも, 子どもと空間との相互作用に着目したも

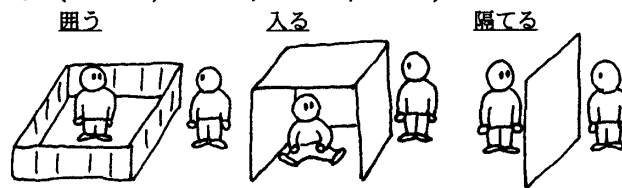
のか, 生活空間や遊び環境に対する子どもの空間認知の側面からアプローチしたものかによって, 得られる結果の性質が異なる。前者は, 自宅や学校など生活環境のごく一部で行われる行為を対象としているが, そこで生じる詳細なプロセスを明らかにしようとするアプローチであることから, 以下では「ミクロ空間論」と呼ぶ。反対に, 後者は, 生活環境全般を視野に入れ, 「隠れる」場所の特性や他の場所との関連を明らかにしようとするアプローチであり, 「マクロ空間論」とする。

まず, ミクロ空間論に関しては, 中川(1993)と荻田(1997a, 1997b, 1997c, 1996)が主に取り扱っている。まず, 既に紹介した中川(1993)は, カクレンボそのものの分析とともに, 大学生に対して「子どもの頃大好きだった場所」を質問

中川(1993 : 著者が図式化)



荻田(1997a, 1997b, 1997c, 1996)



福良(1995)

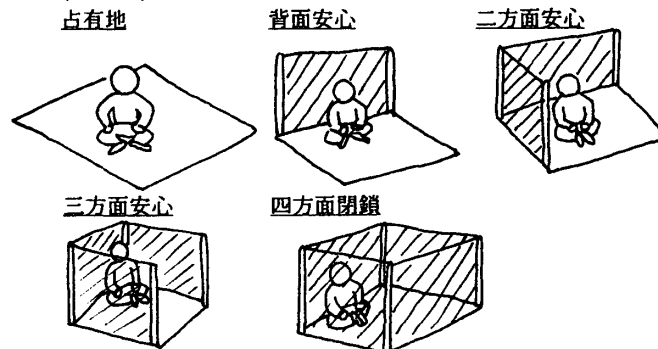


Figure 2 ミクロ環境における「隠れる」場所の特徴・構造に関する整理モデル

紙を用いて調査し、「〇〇の下(例:テーブルの下)」「〇〇の中(例:押入の中)」「〇〇の間(例:ソファと壁の間)」という共通性を見出した。更に、「秘密の場所」の必要条件として、(a)人目につかないところ、(b)親の干渉を受けないところ、(c)なにかの陰、(d)すみっこ、(e)なにかに囲まれたところ、(f)なにかとなにかの間、という6点を挙げている。

これらの知見のうち、「〇〇の下」「〇〇の中」「〇〇の間」という3つの共通性は、屋内の隠れ場所に関する物理的特徴を概念化した一つのモデルとして興味深い。が、「秘密の場所」の必要条件で挙げた(a)と(b)が示唆する対人的側面に関しては、この中には含まれていない。したがって、対人的側面も含めてどのように概念化していくかという課題が残されている。

その点に関しては、同様に先で紹介した、幼稚園内における子どもの「隠れる」「場(place)」の構造に関する著者のモデル(1997a, 1997b, 1997c, 1996)が理解の一助となるかもしれない。

前節で紹介したように、著者は、中川も指摘している、隠れる「主体」と隠れ「場所」との関係だけではなく、隠れる対象となる「他者(相手)」も含めた三項関係として、「隠れる行為」が行われる場を考察した。また、その三項関係の共通性として、「囲う」「入る」「隔てる」という空間構造も明らかにしている。

ここで、中川が示した「〇〇の下」「〇〇の中」「〇〇の間」という状態と、著者が示した「囲う」「入る」「隔てる」という空間構造をそれぞれモデル化して比較してみよう(Figure 2参照)。

中川の知見に関しては、言葉から受けるニュアンスをもとに著者がモデル化したものであるが、この図を見ると、いずれの知見もモデル化すると非常に類似していることが見て取れる。

更に、福良(1995)も人間が安心する空間の構造を「囲い」という言葉を用いて表現していることを考えると、上記の概念はいずれも、子どもにとっても大人にとっても「隠れる」場所や安心できる場所の構造概念として共通しているのではないだろうか。

ただ、以上のような概念を用いて説明できる

空間であっても、やはり子どもと大人では違う面も多く残されている。例えば、幼児や児童にとって「隠れる」のに「ちょうどよい」大きさの空間であっても、成人にとっては窮屈で圧迫された空間として不快感を与えるかもしれないし、反対に、成人にとっては「ちょうどよい」空間でも、子どもにとっては大きすぎて「隠れる」場所としては魅力がなかったり安心できない、ということは容易に想像できる。一つの仮説として、こうした事態は、「隠れる」主体の身体の高さと「隠れる」場となる空間のサイズの比率によって生じるのではないだろうか。この問題については、今後新たな検証を行う必要があるだろう。

次に、マクロ空間論に関して、「隠れる」場所の特徴を概念化した研究は、主に寺本(1988)、南ら(1995)、仙田(1992)が挙げられる。

このアプローチの目的は、生活環境全般の中で、その他の空間との関係の中で「隠れる」空間がどのような機能や意味を持っているのかを明らかにすることにある。したがって、ここでは、南らが示した7つの空間配置を基盤としながら、寺本と仙田の知見を加えて子どもの生活空間について図式化したものが、Figure 3である。彼らの知見については、図中だけでなく先にも紹介しているため、ここで重ねて紹介することは避ける。

しかし、実際のところ、マクロ空間論に関して明らかにされていることは、それほど多くはない。上でまとめた図式についても、本来子どもの生活環境や遊び環境全般について説明するための知見をまとめたものであり、現時点でマクロ空間論に関するアプローチには、二つの大きな問題点が残されている。一つは、先行研究の知見の多くは、「隠れる」空間の具体的な特徴や空間配置については触れているが、その空間が持つ機能や意味については十分に検討されていないことである。もう一つは、秘密基地や隠れ家の機能を「隠す」「隠れる」という言葉を使って説明しているが、それはトートロジーに陥る可能性を秘めており十分に説明しているとは言えない、ということである。

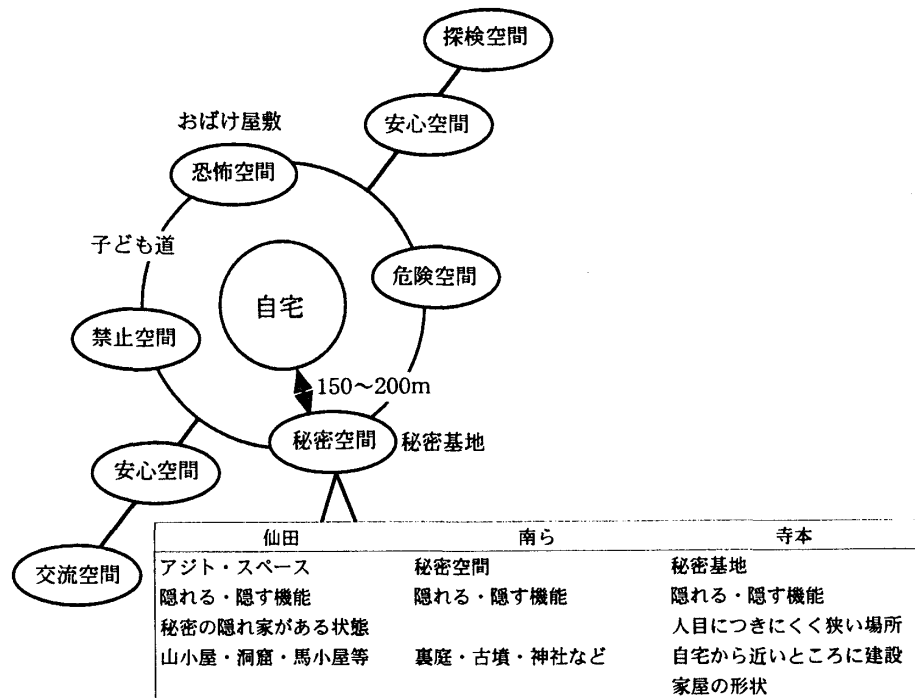


Figure 3 マクロ環境における「隠れる」場所の特徴・構造に関する整理モデル

したがって、今後は単に「隠れる」空間に関する実証データを集めることだけではなく、抽象化（モデル化）や理論化を念頭においた取り組みが必要とされるであろう。

以上示したように、ミクロ空間論とマクロ空間論のいずれも、それぞれに課題が残されている。しかし、ここでは整理のために比較する形で記述したが、本来この二つは相互補強の関係にあるといって良いだろう。例えば、寺本が挙げている『見つかりにくく狭い場所』や『家屋の形状』といった秘密基地の特徴は、おそらくミクロ空間論で表わした「隠れる」空間構造と同じ概念を表わしているといえる。反対に、ミクロ空間論の「隠れる」空間構造は、その外に別の空間があることを想定したうえで初めて成り立つモデルといえるだろう。

したがって、空間論として紹介した先行研究の全てに対して指摘できる全体的な問題点は、これまでいずれかの視点に偏ってしまい、複合的なモデルや理論を提示してこなかったことであろう。（もちろん、本稿では「隠れる行為」をターゲットとしているため、「隠れる」場所・秘

密空間を取り上げたが、この問題は、その他の行為や空間についてもいえることである。）

ゆえに、今後の「隠れる」場所の空間論に関しては、ミクロ空間論のように、子どもが「隠れる」時に用いる物理的環境（もの）やその時の対人的な配置など、「隠れる」‘場 (place)’ が持つ構造を詳細にモデル化するとともに、もう一方で、マクロ空間論的視点から、生活環境全般の中で、他の空間に比べて秘密空間が子どもを引き寄せる比率や他の空間との相違点を更に明確にしていくことで、「隠れる」空間が持つ意味について、より精緻で体系的な理論が構築できるものと考ええる。

VI. 討論

(1) 第3の試論：変遷論

すでに前節において先行研究の知見を「解釈論」と「空間論」の二つの枠組みを用いて概観した。

しかし、この二つの枠組みにしたがってこれまでの知見を整理しても、まだ「隠れる行為」の動機が十分に説明されたと感じられない。

Table 1 「隠れる行為」の変遷モデル（仮説）

	乳児	幼児	児童	青年
親和的	イナイ・イナイ・バー	見つかりたいカクレンボ	悪戯しようと隠れる	ダベる？
排他的	？	見つかりたくないカクレンボ	すねて集団から離れる	引きこもり？
建築的	テーブルの下に潜り込む	積み木を積んだお家づくり	秘密基地づくり	自室・友人宅の居場所化？

その一つの原因は、「解釈論」で整理した先行研究の解釈や説明に関することだが、先行研究の多くでは、一つの行為に対して一つの解釈・説明しか用意されておらず、例えば同じカクレンボに関するエピソードでも、オニに見つけられた子と絶対に見つけられたくない子とでは、「隠れる」動機に関する解釈は異なる。しかし、先行研究の中でそうした微妙な行為の違いについて検討を加えたものは少ないし、「解釈論」で想定した二つの軸のみでは、そうした違いを拾い上げることが難しい。

もう一つは、著者自身の経験に依拠する。著者は、幼稚園や小学校において、子ども達の「隠れる行為」を観察していると、もう一つの枠組みで子どもの「隠れる行為」を理解できるのではないかという理解に到っている。それは、「変遷論」である。

例えば、イナイ・イナイ・バーは乳児期に興じていても、幼児期になってまで熱心に行われる遊びではない。また、Elkonin(1989)や浅見・佐々木(1990)も指摘しているように、同じカクレンボという遊びの中でも、最初はただ隠れたり大人と関わることが楽しかった子どもが、加齢にともないルール通りに、見つからないように隠れるようになる。

このように、子どもの年齢によって興味を持つ「隠れる行為」の形態が異なることが示唆されている。しかし、「解釈論」でも触れた「好奇心・コンピテンス」による動機説明とも関連するが、これまでの研究は、その変化をルール理解の認知や知覚世界の広がりといった、子どもの認知的な個体発達として直線的に捉えてきた。

しかし、「隠れる行為」はそのような直線的な変化として捉えることができるのだろうか。そこで、こうした変化を捉える一つのモデルとして、「変遷論」を提案したい。

まずは、「隠れる行為」を以下の3点に分類して考えてみた。まず、「親和的」な隠れる行為という分類を想定してみよう。この「親和的」な隠れる行為には、イナイ・イナイ・バーや、カクレンボの中で見つけてほしそうに声を出すなど、大人やオニとの交流に興味向けられた行為が含まれる。反対に、「排他的」隠れる行為は、先生に注意を受けた子どもが廊下ですねたり、カクレンボで絶対にオニに見つからないように潜む、自分たちで作った空間の中に友達以外の人を入れない、といった他者を排除する側面を持つ。

もう一つ、「建築的」隠れる行為が想定できるであろう。これは、積み木を重ねて家状の空間や秘密基地など、子どもが自発的に独自の空間を作り出す行為をさす（Table 1 参照）。

このモデルのように行為の変化を捉えるならば、子どもの「隠れる行為」の変化は、「発達」というよりも「変遷」という言葉で説明されるほうが適しているだろう。また、「解釈論」で対象と向き合う研究者の立場・解釈の方向性を理解したうえで、「変遷論」で一般的な子どもの加齢に伴った「隠れる行為」の変化を捉えることで、「隠れる行為」の多様性をより多く説明できるものと考えている。

だが、このモデルは、現時点での著者の理解を図式化したものであり、あくまでも仮説の一つである。また、それぞれの変遷に関しても、必ずしも連続的ではない部分も残されており、今

後検討の余地があるだろう。

(2)「隠れる行為」研究の今後の課題

本稿の前半は、これまでの先行研究の流れを概観することを目的として、「隠れる行為」の形態に着目し、整理と概観を行った。しかし、先行研究で取り上げた「隠れる行為」の形態は、きちんとカテゴリーの名前が付けられた遊びや行為形態の一つである。そのようにきちんと名前が付けられた形態は、「隠れる行為」のごく一部でしかない。

一方、著者らの研究(荻田, 1996)では、こうしたカテゴリー化された「隠れる行為」のみならず、テーブルの下に潜り込んで遊んだり、一人こっそりと廊下で座り込む、というように、きちんとしたカテゴリー名はないが、端から見ると「隠れている」と見えるエピソードもかなり観察された。言うなれば、“名もなき隠れる行為”といえるようなこうした行為に関して、先行研究は焦点を当ててこなかった。したがって、今後、この“名もなき隠れる行為”をどのように研究対象として取り上げ、「隠れる行為」全般の中で位置づけていくのか、という課題が残されている。

文 献

- Altman, I. (1975). *The environment and social behavior*. Monterey: Brooks/Cole.
- 浅見千鶴子・佐々木晃. (1990). 幼児の“かくれんぼ”に関する実験的研究 — 遊びにおける幼児の心理的空間の考察 — . 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 第5巻, p19-39.
- Barker, R. G., & Gump, P. V. (Eds.). (1964). *Big School, small school: High school size and student behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Barker, R. G., & Wright, H. F. (1951). *One boy's day*. New York, NY: Harper & Row.
- Barker, R. G., & Wright, H. F. (1949). *Psychological ecology and the problem of psychosocial development*. *Child Development*, 20, 131-143.
- Bruner, J. (1983). *Child's Talk: Learning to use Language*. W. W. Norton & Company.
- Elkonin, D. B. (1989). 幼稚園期の子どもの遊びの心理学的諸問題. ヴィゴツキー・レオンチェフ・エリコニン他 (編), *ごっこ遊びの世界—虚構場面の創造と乳幼児の発達* (神谷栄司, 訳) (pp.132-160). 京都: 法政出版.
- 福良宗弘. (1995). *茶の湯空間とはなにか — 成り立ちと構成*. 東京: 彰国社.
- Gibson, J. J. (1985). *生態学的視覚論 — ヒトの知覚世界を探る —* (古崎敬・古崎愛子他訳). 東京: サイエンス社.
- 荻田知則. (1997a). 幼稚園児の「隠れる」行為のダイナミクス — 幼稚園における自由遊びの参与観察を通して — . 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, 177.
- 荻田知則. (1997b). 隠れる行為におけるプロセス分析の試み — 定性的研究の実際(32) — . 日本心理学会第61回大会発表論文集, 26.
- 荻田知則. (1997c). 子どもの遊びにおける隠れる行為の動機 — 幼稚園における自由遊びの参与観察を通して — . 修士論文 (非公開), 九州大学, 福岡.
- 荻田知則. (1996). 子どもの遊びにおける「隠れる」行為を導く動機の検討(1) — 劇学的動機論による分析の可能性 — . 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 36.
- 荻田知則・南博文. (1997). 小学生時代の隠れ場所・隠れる行為に関する動機説明の理解. 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 第42巻, 九州大学, 福岡, 121-137.
- 荻田知則・南博文. (1995). 遊びを通じた子どもの場所体験に関する文献的研究(1) — 子どもの遊び行動の構造に焦点を当てて — . 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 第40巻, 九州大学, 福岡, 125-139.
- 木下勇. (1996). *遊びと待ちのエコロジー*. 東京: 丸善株式会社.
- 子どもの遊びと町研究会 (編). (1984). *三世代遊*

- び場図鑑 ― 町が僕らの遊び場だ！ ― .
 子どもの遊びと町研究会（発行），東京．
 小林秀樹．（1992）．集住のなわばり学．東京：彰
 国社．
- 小山高正．（1992）．遊ぶ ― 遊びと環境 ― ．心
 理学評論， Vol. 35, No 4, 455-473．
- 中野茂．（1996）．遊び研究の潮流 ― 遊びの行動
 主義から”遊び心”へ ― ．高橋たまき・中
 沢和子・森上史朗（共編），遊びの発達学基
 礎編（pp.21-60）．東京：培風館．
- 中野茂．（1992）．あそび，児童心理学の進歩第3
 章（pp.59-79）．東京：金子書房．
- 南博文・難波元実・塚本俊明・小原潔・遠藤由
 美子・上向隆・吉田直樹・松崎えりか（1995）．
 地域社会における子どもの遊び環境アセス
 メントと親子の環境体験プログラムの開発，
 マツダ財団研究報告書 Vol. 8．
- Moore, G. T., Tuttle, D.P., & Howell, S.C. (1997)．
 環境デザイン学入門 ― その導入過程と展
 望 ― （小林正美・三浦研訳）．東京：鹿島
 出版会．
- Moore, R. C. (1986)．Childhood's Domain: Play and
 Place in Child Development. Barkeley, CA:
 MIG Communications．
- Moore, R. C., Goltman, M. S., & Iacofano, S. D.
 (1995)．子どものための遊び環境：計画・デ
 ザイン・運営管理のための全ガイドライン
 （吉田鐵也・中瀬勲共訳），東京：鹿島出版会．
- 中川香子．（1993）．かくれんぼう ― 内なる世界
 を育てる ― ．京都：人文書院．
- Singer, D. G., & Revenson, T. A. (1978)．A Piaget
 Prime: How a child Thinks, New American
 Library．
- 仙田満．（1984）．こどもの遊び環境．東京：筑摩
 書房．
- 仙田満．（1992）．子どもとあそび．東京：岩波親
 書．
- 仙田満・中山豊．（1986）．こどもの遊び環境マス
 タープラン策定計画 ― ケーススタディに
 よりこどもの遊び環境マスタープラン作成
 の手法を探る ― ．環境デザイン研究所
 （発行）．
- 寺本潔．（1988）．子ども世界の地図 ― 秘密基
 地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間
 ― ．名古屋：黎明書房．
- 寺本潔．（1994）．子どもの知覚環境 ― 遊び・地
 図・原風景を巡る研究．京都：地人書房．
- 徳永雄一郎．（1997）．うつ病専門病棟．精神療
 法， 23,1,51-58．
- Westin, A. F. (1970)．Privacy and freedom. New
 York: Atheneum．